

現代小説の歴史

R・M・アルベレス著
新庄嘉章・平岡篤頼訳



HISTOIRE DU ROMAN MODERNE

Originally Copyright: Albin Michel

This book is published in Japan by arrangement
with Albin Michel through Bureau des Copyrights Français

現代小説の歴史

R. M. アルベレス 新庄嘉章・平岡篤頼訳

発行 1965. 6. 30 三刷 1971. 2. 20

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社 郵便番号 162 東京都新宿区矢来町71
電話東京 (260) 1111 振替東京 808

定価 1,200 円

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本所

乱丁・落丁本はお取り替え致します

現代小説の歴史

R・M・アルベレス著

新庄嘉章・平岡篤頼訳

HISTOIRE DU ROMAN MODERNE

新潮社版

目

次

序 論

西欧小説の冒険……………九

第一部

成長期の諸勢力……………一五

一 ロマネスクの起源——バロックから情緒と不謹慎へ……………一七

二 リアリズムの陶醉……………四一

三 きびしいあわれみの小説……………六三

四 小説の技法……………八四

五 多声樂的小説と壁面小説……………一〇七

第二部

野 党 的 勢 力……………一三九

二十二 想像的幻想美から具象的幻想美へ

——《ヌーヴォー・ロマン》……………四〇五

二十三 小説の使命——プロテウス……………四一〇

二十四 小説——この悲壮なるもの……………四二七

あとがき……………四四四

人名索引……………巻末

現代小説の歴史

序論 西欧小説の冒険

二十世紀の中ごろになって、小説は文学的表現のもっとも普及したかたちとなった。その昔は気晴らしであり、想像力や感傷の安易な充足手段であった小説が、いまや、かつての叙事詩や年代記や道德論議や神秘的瞑想、そして部分的には詩の領分でもあったようなさまざまな意図、責任、不安をまで表現するにいたっている。べつの面ではまた小説は、社会的にいつて、その広汎な伝播力によって、もっとも多様な公衆の間の文学的交感の道具を意味している。『戦争と平和』とか『人間の条件』などといった作品だけが、もっとも注文のうるさい読者ともっとも初歩的な読者との出会いを可能にしているのである……

小説のなかに、現代の西欧の人間はあらゆるものを見いだすことである。彼ら西欧の人間が生みだしたすべてのもの、また彼らを超えるすべてのもの、彼らの運命をも……

……どんな精神の類型にたいしても、小説はそれぞれに恰好の糧を提供する。実証的な精神の人間にたいしては、ことに今日新興諸国家にたいする関心につちかわれた社会的研究を提示し、感受性豊かなひとびとにたいしては、今世紀になって、深淵の深みへ潜入することで更新された、心理のからくりの繊細で酷薄な分析を味わわせる。論争マニヤにたいしてさえ、小説はアクチュアリテへの参加の機会となり、自己の不可解な運命を自覚する人間にとっては、人間の課された条件と世界の非人間性にとたいする不断の問いかけの契機となる。同時にまた、小説は万人にたいして、悲壮な物語、冒険談、小噺などに特有の子供っぽい楽しみを味わわせる。懺悔聴聞僧、共産党政治局員、子供づきの女中、時事記者、魔術師、秘教の信徒と、小説はありとあらゆる役割を演じ、この普遍的芸術が、しだいに他の

あらゆる文学芸術にとって代って、現代における教養のもつとも一般化した形式となろうとしている。「たとえわれわれがそれを喜ぼうと歎こうと、小説は、大衆にもつとも親しまれた表現形式であり、今後も久しく、そのことに変わりはないだろう。その活力とその柔軟性には比類がなく、小説というこの古い木の幹に、およそこの上もなく突飛で、(原注)抽象的で、晦渋な変種が今をさかりとはびこっている。」

〔原注〕 Pierre de BOISDEFRE : Une Histoire vivante de la littérature d'aujourd'hui, p. 215, Le Livre contemporain, 1958. — ボワデッフール『今日の生きたフランス文学史』。

小説芸術の魅力と、そしてその曖昧さとは、この芸術が一方では「物語」としてのなまの迫力をもち、それと同時に他方で、この物語が内にふくむ心理的・社会的・存在論的・美的・象徴的余響の広大な音域を提出することができるという事実に由来している。現代の読者はしばしば、この二元性に引き裂かれる。この二重の魅力、二重の牽引力、二重の幻惑の実体をつかむことができるのは、小説の歴史——というかわしろさまさまざまな小説的発想の歴史を書いた本だけであろう。

近代小説の歴史は、そのまま不謹慎の歴史である。個人あるいは集団の意識の、どんなに内密な衝動も、他の芸術は——たとえ具象芸術であっても——それを象徴的あるいは装飾的フォルムのなかに昇華してしまう。ところが小説とは、細密画ミニヤチヤと同様、細部の芸術なのである……壮大な、あるいは卑近ななにかの物語、というその発生以来、小説はしだいに豊饒な、しかし同時に内面的な素材にむかって、たえ間なく進化してきた。

各人の内面のもっともひそかな、混沌にみちた深み、といったものが十七世紀末以来、西欧小説をたえず惹きつけつづけてきた深淵なのだった。無意識的にこの幻惑のとりことなり、自分のほうからもすすんで身をまかせて、読者は、小説の読書から嗜虐的な快楽をひき出すというこの吸血鬼の役割を、易々として引受けた。この快楽がこぼれたりすると、その小説は「ひややか」だといわれた。

ルソーからドストエフスキーをへて、モーリヤックあるいはナタリー・サロートにいたると、この誘惑は執念となり、目まいのようなものとなる。小説芸術とは、探險の芸術、あるいは無遠慮な、ぞきの芸術であり、「すぐれた作

家とは、われわれの生の内部の、一見したところ伝達不可能と思われる部分の、認識と表現を助けてくれる作家のこゝとである。」

〔原注〕 Georges DUHAMEL : Essai sur le roman, p. 34, M. Lesage, 1925. — *Le roman expérimental* 『小説論』

しかしながら小説の無遠慮なまなこ——あの小説の目まい——がふり向けられるのは、たとえどんなに不可解なものであろうと、怪しからぬものであろうと、感覚や感情がどんな性質のものかという点にたいしてではない。小説的サディズムが暗黙のうちに目ざすのは、これはわれわれの文明史上はじめてのことであるが、城塞の中枢部、すなわち「意識」なのである。各人が自分の胸の底に見出すあの緊張下の空白、咽喉の奥のあのいがらっぽい味、感動や思考のあのつかみどころのない干満、およそ使いみちのない思い出の堆積、サルトルが『嘔吐』のなかで具体的に描写したあの悲惨、あの孤独なのだ。これまで生きてきた一生をふりかえってみても、われわれはおしなべて、見すばらしいことおびただしい。だがわれわれは、隣人の意識、小説の主人公の仮空の意識に忍びこめば、なにか援助と啓示が見つけれそうに思う……それが小説と呼ばれる、あの

読み終るともうふりむきもしないたぐいの書物に、われわれをとびつかせる理由である。

小説を読むというのはしたがって、小説病にかかることである。小説はまた、人間だけのかかる病気である。自分の意識だけではものたりず、他人の意識のなかにも踏みこみたい、他人の生をも生きてみたいと願わずにいられない人間、そうすることによって、たとえ仮空の生のなかにも、関心に値いするものがあるかどうか、調べずには気がすまない人間のかかる病気である。小説は、死にとつて代るべきものなのだ。それは、個人の運命を定着させようとする。たとえどんな運命であらうと、とにかく定着させようとするのだ！……小声でそつといおう。小説は、永世という觀念にとつて代つたのであり、たえず更新されるその代用品なのである。

小説というジャンルのパラドックスとは、つぎのごときものである。発生的には、またもつとも手短かに定義するなら、小説は「話」とか、物語とか、作り話とか、ほんのとりなたりない想像力の遊び、アメリカ人たちがいう「フィクション」〔虚構〕……などといった、もつとも初歩的

な『文学的』要請に対応するものであった。だが、数世紀にわたる進化をとげた今は、さまざまな新しい意図をわがものにし、はるかにそれ以上にひそかな、内密の、深い要求にこたえるものとなっている。

それゆえ、ことの経過は明らかである。西欧の文学は、しだいにそのさまざまな『定型』をかなぐりすててゆき、二十世紀にいたって、形式の欠如そのものであるこの文学形式、間に合わせのジャンルでありながら、しかも途方もない普及力をもつこのジャンルに、そのほとんどありとあらゆる意図、可能性、探究、それも密儀的な探究さえも集中してしまったのである。元来このジャンルは、物語やエピソードや冒険談を語り聞かせることしか目標にしていなかっただけに、そうした審美的・社会的・形而上学的な野心のどれひとつも予想していなかった……小説とは、その本質と無関係な各種の意図によって豊かになった、本来軽薄な（古代においては俗悪とみなされ、十八世紀までは軽蔑されていた）文学ジャンルなのである。

『現代小説の歴史』と題する以上、本書はそういったふたつの傾向を結びあわせ、小説というジャンルの発展の過程において、このふたつの傾向が相互にいかなるかわり合いをもったか、すなわち小説が、本来小説でないものによっていかに豊かになって行ったかを明らかにしなければなら

ない。しかし私は、このジャンルの発展の諸条件を、歴史家として記述しようとは思わなかった。ただこの世紀の後半になって、耳にはいってくるさまざまな『小説の声』を集録しようとしてみただけである。

したがって、これは文学史というものではない。現在において、また現在に立つて過去をふりかえるときに、小説というこのいまも昔も変らぬ文化と表現の形式から発して、われわれの耳にまで聞えてくる無数のつぶやきをキャッチしようとしただけである。われわれはことに、現在の声の振幅のひろさをそのまま尊重し、この時代の作家たちにもっとも多くのページをさくことをためらわない。しかし過去の世紀の小説も、現在の声の抑揚をひきたたせる、排除することのできないバック・ミュージックを構成するかぎりにおいては、ないがしろにしないつもりである、どんな読者にとっても、小説というものは、彼の時代の文学的創造だけに限定されないものである。今年の文学賞受賞作品より、ドストエフスキーのほうが好きだという場合だっていくらかもある。

同様に、小説の現状、というものを語る場合、伝統的な一国の文学の研究だけにとじこめることもできない。今日のフランスの読者は、ブルーストやマルローとまったくおなじ程度に、ドストエフスキーやジョイスやダレルを読み、

翻訳の氾濫は小説的教養を、西欧におけるひとつの国際的教養に変えた。どう考えてみても、われわれは、誰もが翻訳や原典によって容易に読むことのできる、ヨーロッパの小説——たとえばイギリス、ドイツ、イタリア、スペインの小説——というものの総体を考慮しないわけにはゆかないのである。しかしアメリカ、ロシア、あるいは南アメリカの小説は多少別扱いするのが妥当と思われた。これらの国の小説は、社会的にも知的にも、われわれの世界とはかなりちがった世界で発展してきたから、その歴史をヨーロッパ小説の歴史と同一視することはできない。

* *

多少古い作品でもどんどん再刊され、また無数の翻訳が出版されるおかげで、小説の読者は今日、過去の声、現在の声、自分の国の声、外国の声を自由に聞くことができる。《リーダー》とでも呼ぶべきものによって、『ジャック・マセの旅行と冒険』、トマス・ハーディー自然主義叙事詩、またバリのくろうと筋の間でもてはやされる最新刊の小説を、同時にキャッチする読者だって容易に想像できるのである。

〔訳注〕 シモン・ティソ・ド・バトの作品。本書二五ページ参照。

自分の受像器にうつる、小説のさまざまな映像を調整しようとする読者からすれば、批評家とは、適切な受像、すなわち電波を同調させることの専門家にしかすぎない。リーダーの受像幕にうつる像を、ひとより正確に読むことを学んだ技術者である。この受像幕は鋭敏で、過去と現在の像が重なり合い、お互いが他を説明している。私は本書で、ただこの《同調》の技術、《調整》の技術の手ほどきをするだけである。

過去および現在の偉大な小説家たちにたいし、また小説というもののさまざまな意図にたいし、この『現代小説の歴史』は、明確な芸術的定義を与え、おそらくは《位置測定》の座標軸も与えよう。それ以外の余計な知識は求めないでいただきたい。私は現在《生きていく》、すなわちその《声》を聞くことのできるすべての小説家を取りあげ、なにが彼らの生命を支えているか、なにが彼らの現在の地位を規定しているかを示そうとした。それもこうすることによって、彼らがいつそう認知しやすく、また近づきやすくなり、必要とあらば彼らを知らない読者も、彼らを認知し、位置づけ、選んだり拒否したりできるようになればと思ったからである。とくに作品を簡単に紹介したり、引用

したりすることによって、彼らの「声」に生気を与えようとした……ゾラとかナサニエル・ホーソンとかローレンス・ダレルが、ここでは、それぞれの感受性とか意図した目標によって規定されている。だが概論書によくあるような、彼らの略伝や作品総目録は収めなかった……六百ページの大部と称しながら、うち三百ページが他の百科事典的著作からまる写ししたというのでは、あまり誠実といえないからである。そのような、純粹に学校向きの資料は、どんなつまらぬ辞書にも出ている。そうした概論書類を参照していただくとして、私は、作家や作品の小説的発想、色調、トーン、傾向しか考慮しなかった。

〔原注〕 もっともふつうの慣例にしたがって、一箇以上のセンテンスを引用した著作以外、出典を付記しない。

最後に、最近の文学的分析はかなりしばしば、まるで文学作品の誕生の過程を説明し、再構成することこそいちばん大切なことであるかのように——文学研究が「科学」の名を僭称した名残りだが——作品と作者との関係、作者とその時代との関係といった、創造の問題にのみ拘泥している。世界小説の道をきりひらくために、私はここでは、もっとすなおに、作品というものが外にあらわれる姿、それ

が読者に要求する心構えを検討しようとした。創造の現象学をすてて、作品と読者との関係のしかたの現象学を志したわけである。

文学史のわくの中でだけではなく、そうしたわくや図式をばかし消し去ったこのような回想形式によっても、本来自分とは無関係なものを糧として成長してきた、このジャンルの多様性をおして、西欧小説の変遷を追体験できるものである。西欧小説は、近代的人間とともに生まれ、彼の成長と平行して発展してきた。ある文学ジャンルの歴史というものは、われわれの歴史とほとんど一致し、少なくともわれわれの運命と平行しているものである。

第一部

成長期の諸勢力